

Special Essay

読書について

臨床検査部 中島 収

私は読書は比較的好きな方であるが読む時と読まない時の波がある。続けて数冊読む時もあるが、全く読まない時が半年くらい続くこともある。私にとっての読書は映画をみるのと同様に娯楽的な要素が高い。夢より明確にその時代や空間に入り込んだかのように感じることができるからである。最近ではインターネットやスマートフォンなどで動画などの画像を通勤時間やちょっとあいた時間に読書と同じように楽しむことが可能になったが読書ほど人目を気にせず没頭することはできない。

私は文庫本派であり、カバンの中に入れ、移動しながら少し空いた時間に読んだり、休日にはまってずっと読んだりするが後の方が好きである。

最近では評判になっている百田 尚樹の「永遠の0」「影法師」を読んだが確かに加齢のせいか涙無くしては読めない本であった（通勤時間には読まない方がよいかも）。また娯乐的に面白すぎて深夜まで読み続けた本がスティーブ・ラーソンのミレニアム1～3（「ドラゴン・タトゥーの女」を含む）であった。これは上下巻合計6冊であるが数日で読んでしまうほど面白かった。電子書籍は今後さらに浸透すると言われているが個人的には文庫本による読書を続けたいと思っている。

本は知的欲求や精神的娯楽を満たすのに必要不可欠な媒体の一つであるが今後、その形態が大きく変わる可能性はあるものの文字が存在するかぎり読書という習慣は永遠になくならないのであろう。

